

令和6年度 研究の概要

B4・5グループ

自ら解決の筋道を見出すことができる児童の育成

㊦ 宮根小 加藤 奈都子 ㊦ 表山小 鈴木 皓太 自由ヶ丘小 川嶋 美唯

田代小 中根 尚之 桃山小 西澤 佳奈

1 研究のねらい

私たちは自ら解決の筋道を見出すことができる児童を育てたい。私たちの考える「自ら解決の道筋を見出すことができる児童」とは、課題が明らかになると、自ら既習事項を想起し、それをを用いて、解決の見通しを見出すことのできる児童のことである。

しかし、私たちの担任する学級では、提示された本時の問題に対して課題を明らかにできても、どのように解決すれば良いのか分からず、他の児童の考えが発表されるのを待ったり、板書された考えを写したりするなど、自ら考えようとしないう児童が見られる。また振り返りをさせた際には、どのようにして解決に至ったのかを説明できない児童も見られる。そのため振り返りでは、例えば「 $3 \times 0.8 = 2.4$ になると分かった」などと結果のみを答え、解決に至った考えを見出すことができない子がいる。これは、明らかにできた課題に対して、どのような既習事項を用いれば解決できそうかを発想させることが不足していたことや、どのようにして解決に至ったのかを振り返らせることが不足していたことが原因と考える。

そこで、本グループでは、導入の場面で課題を明らかにし、振り返りを基に見通しをもたせるための手立てと、解決に必要なだった考え方を振り返らせる手立てを講じる。これらの二つの手立てを工夫することで、本研究の目指す児童の姿に迫っていきたい。

2 研究の内容

(1) 指導上での問題点

私たちの指導には、児童が問題解決に向かう際の筋道を児童自ら見出すための工夫が不足していた。そのため、未知の問題に出会った際に既習内容と結び付けて問題解決しようとする姿を引き出すことができなかつた。そこで、導入の場面において、本時の問題の課題点を明らかにさせ、課題解決の見通しをもたせるための工夫をしたり、振り返りの場面において、課題解決をするためには何が必要だったかを明らかにさせるための工夫をしたりすることで、私たちが直面する指導上の問題の解決につながると考えた。

(2) 具体的な手立て

手立て① 本時の課題を解決するための見通しをもたせる場面の工夫

本時の問題と前時の問題を比較させることでさせることで、本時の問題の課題点を明らかにさせる。その後、前時までの既習事項を振り返らせることで、自ら解決の見通しを見出すことができるようにさせる。

手立て② 本時の問題を解決するために必要だった考え方を振り返る場面の工夫

授業の終わりに「どのようにしたことによって解決に至ったのか」と発問し、それを共有することで、本時の問題を解決するために必要だった数学的な見方や考え方を振り返らせる。